

慶祝 医家芸術600号

豊泉 清

平成19年8月17日付の群馬県の地方紙・上毛新聞に「史上最高40・9度」という大見出しの記事が載った。前日の8月16日に、埼玉真熊谷市と岐阜県多治見市で、日本の気象観測史上で最高となる40・9度という気温を記録した。従来の記録は昭和8年(1933年)に山形県で観測された40・8度だから、僅か0・



1度だが、実に74年ぶりの記録更新である。地球温暖化と呼ばれる久しいが、温暖化どころか焦熱地獄と呼ぶ方が相応しい猛暑である。生きているうちに41度台の気温も体験できようである(図左上)。スポーツ界に「記録は破られるためにある」という名言がある。ある選手が新記録を樹立すると、他の選手がそれを上回る記録を目指して努力する。またスポーツ界では「壁」という言葉もよく使われる。それまでの記録から判断して、永遠に破れないと思われる区切りの良い数字である。例えば陸上

100メートルの10秒00は絶対破れない壁だと、長い間信じられていたが、ある超人的な選手が史上初めて9秒台の記録を樹立すると、その後もう9秒台で走る選手が続々と現れる。最近のオリンピックや世界選

手権の優勝記録は9秒台が常識で、10秒台では予選落ちである。では100メートルの記録を辿ってみよう。

9秒95	1968年
9秒86	1991年
9秒79	1999年
9秒69	2008年
9秒58	2009年

平成21年(2009年)8月に、ジャマイカの選手が9秒58という驚異的な新記録を

樹立した。世界初の9秒5台への突入である。現在は精巧な計測装置で100分の1秒まで正確に測れる。100メートルを9秒台で走ると、0・01秒で約10分の差が生じるから、真横から見ると他の選手より胸の暑さくらい前を走っても新記録になる。

マラソンの記録は2時間10分台が続き、「10分の壁」と呼ばれる時代が長かったが、昭和42年(1967年)にオーストラリアの選手がマラソン史上で初めて10分の壁を破る2時間9分36秒という驚異的な記録を樹立した。その後も留まることがなく次々に記録が更新され続けている。

2時間9分36秒	1967年
2時間8分33秒	1969年
2時間7分12秒	1985年
2時間6分50秒	1988年
2時間5分42秒	1999年
2時間4分55秒	2003年
2時間3分59秒	2008年

平成20年（2008年）にエチオピアの選手がマラソン史上初の2時間3分台の記録を

樹立した。この趨勢が続けば2分台や1分台の記録も夢でないと思われる。

平成21年（2009年）7月17日付の上毛新聞に「平均寿命 女性86・05歳」という見出しの記事が載った。平成20年の日本人女性の平均寿命は86・05歳で3年連続で過去最長を更新し続け、24年連続出長寿世界一の座を守った。余談だが、長寿は理屈抜きにめでたいという思想がある。還暦や古稀の他に、長寿を祝つて「七」という言葉がいくつもある。長寿は喜の俗字の「喜」が七を重ねたように見えるので7歳を意味する。傘寿は傘の俗字の「伞」が八十のように

見えるから80歳を意味し、米寿は米の字が八、十、八に分解できるから88歳を意味し、卒寿は卒の俗字「卍」が九十に見えるから90歳を意味する。百の最初の一字画を除くと白になる。100 1 = 99、つまり99 = 白という駄洒落で99歳を白寿と呼ぶ。

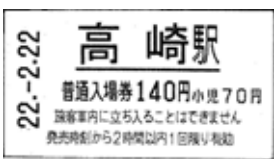
一般的にはあまり馴染がないが、半寿、珍寿、茶寿、皇寿という言葉もある。半は八十一と分解できるから81歳、珍の偏の王は十と二に分解でき、旁（つくり）は八と三に見えるから珍寿は12 + 88、つまり100歳の祝いである。皇の上半分は99で、下半分の王は12と見なせるから、皇寿は99 + 12、つまり111歳を意味する。いずれも漢字遊びのような命名である。茶寿や皇寿という言葉が存在するが、昔も実際に祝った人がいたのだろうか。

平成22年5月5日付の上毛新聞に、「子供の数 29年連続減 最少更新」という記事が載った。総務省が発表した人

口推計によると、15歳未満の子供の数は1694万人で、統計数字が残っていて比較可能な1950年代以降の最少記録であり、29年連続の減少である。総人口に占める割合は13・3%となり、36年連続の低下である。

国連の人口統計年鑑によると、人口4000万人以上の世界26カ国の中で13・3%は最低である。長寿と少子化が同時に進捗しつつあり、最長と最低の世界記録を、同時に達成した異様な国である。

日本の最高気温 スポーツの新記録 日本人女性の長寿や少子化傾向を報じる新聞記事を披露してみたい。私は最高記録や新記録の記事をコピーして整理・保存している。平成22年2月2日の2が並ぶ日に、高崎駅で入場券を買った。また本年1月16日付



の朝日新聞には通算44444号(日刊)と書いてある。約122年の歳月を要して到達する号数である。最高記録や新記録に関する新聞記事だけでなく、同じ数字が並ぶ日付の入場券や郵便局の消印を集める趣味の持ち主でもある。

最近では電話番号や車のナンバープレートが自分で選べる。例えば3337(三三八ナ)と読ませる耳鼻科医院の電話番号がある。私は新車を買った際に4122(良い夫婦)という語呂合わせの番号を依頼したら、希望に通り手に入った。数字の駄洒落や語呂合わせに鈍感な人は、4989(四苦八苦)や3396(さんざん苦労)などという番号でも無頓着なのであるが。

「医家芸術」誌・通巻600号到達を祝って、数字に関する話題を羅列してみた。長寿機関誌を発行する団体に所属している縁に感謝しながら、末端の一會員として今後も可能な限り駄文の投稿を続けたいと念じている。

医者が患者になると

上田 正昭

余り自慢にならないが、いつだろつか記憶すらない程昔から、睡眠導入剤のトリゾラム錠の厄介になっている。

不眠症で薬を使用せず眠れぬ一夜を悶々と過ごすより、なお依存性があるといわれようと、特別直接的な弊害を受けないので、つい安易に継続的使用が習慣になっていたのが実情。

その能書き、たまたま手元にあったので開いてみる。そして副作用の項に……………(2)精神症状(頻度不明)、刺激興奮、錯乱、攻撃性、夢遊症状、幻覚妄想、激越等の精神症状があらわれることがあるので……………と述べられている。

話は飛び、今年の1月3日(日曜)に上腹部の激痛と発熱、元々胆石、サイント・ストーンを保持していたもので炎

症を併発したと思われ、救急病院へ緊急入院。1週間は絶食で、点滴だけ。1日が実に長く覚える。

ようやく炎症が治ったところで、内視鏡手術、危険と判断され途中変更、開腹で胆嚢摘出。勿論全身麻酔のため術後に執刀医から説明されたもの。

患者サイドとすれば、手術時の時間帯が途切れていて、気付いたら病室に戻っていたといった次第。有難いことに術後の疼痛も腰椎硬膜外麻酔で緩和されている。

しかし手術は手術、身体を動かすと術創に入っているカニューレが腹膜を刺激して飛び上がるほどの激痛。主治医が回診の度毎

「なるべく身体を動かすように、どんどん歩いてください。回復に相違が表われますから」

と気合を入れられる。本人は歳も歳だし、氣息奄々としていて、半身を擡げるにも看護師を呼び、抱き起こされなければ

ば情け無いことに、にっちもさっちも動けないと泣き言をいい続けている。

恐らく体力もDNAの細胞生成力、年齢による能力低下があつて、腹壁の術創一部が着かず、分泌物が止まらない。しかし化膿ではない。麻酔の進歩で苦痛は軽減されるも、手術のストレスによる身体的ダメージ、殊に高齢者の場合は自身の想像以上に強烈なのだ。

再び冒頭の話に戻すと、手術後でも寝付けない。私の持参した眠剤はナース・ステーションへ預けてあり、要求すると一応当直医に伺つたことごとく、

その医師親切にも病室へ顔を出し、私へ
「点滴へ注射用の眠剤を流しませよ」と告げ、ナースに指示されて戻られた。せつせと毎日病室へ顔を出す女房が、その翌日、耳元で囁くような小声。

「貴方、昨夜は暴れて大変だったらしいわよ」「何回点滴の針を刺しても抜いてしまい、血だらけになって、寝間着を替

えたりしたそつよ」「何も覚えていないの」

「そつが眠剤の副作用、興奮、錯乱状態だつたらう。初めて幻覚を経験したんだ。怖くはないが、心地よいものではないな」

恐らく夜勤看護師の引き継ぎ事項になつている事件なのに、誰もが内緒にしている。眠剤を処方した当直医の責任もあるつから。

そんなトラブルがあつてからナースが「ベッドを離れる際は、必ずナース・コールを押して下さいね」。

コード付きのセンサーが私に着けられている。先のようなトラブルを事前に察知しようとするメソッドだった訳だ。納得。夢が現(まづ)か幻(まぼろし)か。昼か夜か判然としないが、幻覚、幻聴、幻視を体験したのは事実。

はからずも私の入院の個室は、入口の扉を開くと横にトイレ。小さな空間があつて、カーテンで寝室と分けられている。

ふと気が付くと、その空間、カーテンの影に若い男女が隠れ、抱擁しながら小声でお喋りをしている。うるさい。煩わしいのだ。

今考えると実に滑稽な話で、カーテンを透視して、夜は電灯の下、實際、電灯など無いのに見えるのが不思議。何故若い男女なのか。昨日も今日も、気が付くと2人。

実は私、前立腺全摘、現在も女性ホルモン注射を継続していて、セックスには何の反応もなく、全く興味もないのに。

さて、世の中、老人であるために袖にされる場面が多い。反対に若者に対する羨望があることも間違いない。そんな潜在的な心理が幻覚といったスタイルで顕在化されたのか。

いや眠剤ばかりでなく、高齢者、殊に術後といった体力減退の場合は、充分薬剤の副作用に注意し、場合によって処方量を減量する必要もあつてしかるべきだつらう。

怪物患者

モンスターペイシャント

浜名 新

怪物患者とは、医療従事者や医療機関に対して自己中心的な理不尽な要求、または暴言・暴力を繰り返す患者や保護者等を意味する和製英語である。教育現場で教師に理不尽な要求をつきつける親を「怪物」に喩えて「モンスターペアレント」と呼ぶのと同様、医療現場でモラルに欠けた行動を取る患者をこのように呼ぶようになった(Wikipedia)。

ある医師からの伝聞である。風邪ではないかと20歳代後半の女性が外来受診し、当日の担当医は上気道感染と診断・処方した。患者は薬をその日から内服した。だが、解熱せず喉も痛く治らないので3日目にも再受診。

医師「どつなさいました」

患者「少しも良くなりません。診察費を返してくれませんか」

医師「カルテに急性上気道感染として抗生剤・解熱消炎鎮痛剤・咳止めの薬が5日分処方されております」

患者「診察費を返してもらえないなら、消費者センターへ訴えます。よろしいですね」

医師「どつぞお気の済むようになさってかまいません」

患者の性格、性癖が大いに関係しているとは思っている。だが、医療に対する過剰な期待が背景にある。医療の進歩で、「どんな病気もじきに治るはずだ、治らないのは担当医師の治療が悪いのだ」、「マスクミの医師ハッシングの過剰な報道」から短絡的に行動する患者が多くなっているのかもしれない。

果たしてそれだけであろうか？ 医療行為には完全といつことは少ないのではないか。それを補つのが患者各人に備わった自然治癒力である。

医師がつつかりミス、技術的落ち度から患者に不利を及ぼしたと考えられる場

合、病院の医師は「アクシデント報告」を提出しなければならぬ。医療評価チームはその報告書を討論し、「是々非々」に判断・結論する。「モンスターペイシャント」に至らした事例では、接遇・診察・治療行為の過程で、患者側に不満や不利な結果をもたらした「何か」が存在するに違いない。

年々、患者の権利意識は高まり、患者側に不利な状況が起れば、言葉や文書で医療側を質す傾向がある。マスクミは報道する。医療側は中立的立場の第三者から両者の言い分を客観的に整理・判断してもらつた必要がある。

仮に医療側に落ち度が無ければ、毅然として苦情をはねつけねばならない。だが、診察義務、医療はサービスマンとしての認識から簡単に処理できないのかもしれない。患者側はカルテ開示を求め、裁判所に証拠保全を請求、警察に告発し訴訟に発展する事例は統計上増加している。「モンスターペイシャント」が外来や窓

口で騒げば、医療側の困惑は計り知れない。怖い時代になった。

私は療養型病院に勤務して数年になる。多くの患者は寝たきりで訴えることも出来ない。だが家族の患者への気持ちには永遠で生命の延長を望む。終末期病態として呼吸器や尿路系感染症、間質性肺炎やCOPDによる呼吸不全、神経難病の末期、癌末期、胸水貯留や痰からみ患者は多い。「延命」を基本と考え対応している。

こんにちは・ひとこと

白 矢 輝 靖

伯父の勧めで、父と同じ写真部に入ることにしました。これまでにたくさんカメラの撮影技術を学んだことはないのです。初歩から勉強です。(写真部)

蝶と私の物語 第四話

蝶さんにお願

大塚 博 太

お願い 蝶さん 優しい花を見つけてきてください。

これが自由に大空を飛び廻れる蝶さんに、私からのたつてのお願いなのです。

蝶さんたちにも分かります。この殺伐とした世の中、殺人、強姦は日常茶飯事、国家為政者といわれる人の政策に、言つやすく行つは不可能の状況が続いているのが現状です。

一般庶民のいらだちは日に日に高まるばかり、一体我々庶民の生活は、これから先どうのように変わってゆくのかと思いたくなる毎日です。

そしてこの日本の不安な社会情勢をよくするのは、今の政治の力では先ず無理と私には思えるのです。

表を歩いている人たちの表情を見て

らんない。その顔には覇気はさうに見られず、ただ無表情に時の流れに身をゆだねているだけに、私には思われるのです。

そしてそのすさんだ人々の心の中を癒して咲き乱れる草花、そしてそこに漂う甘い香りと私は思っています。そしてそれを可能にするのは蝶さんたちの手(？)を借りなければ出来ないと思っています。

どんな路地の片隅の土の上にも、あなたたちが運んできた種を落としてみてください。それを繰り返し続ければ、やがて何時の日にか草花の可憐な花とやさしい香りが、町の雰囲気を一変し、人々の心に安らぎとなごやかさを取り戻してくれると思っています。

蝶さん達の飛び交うおだやかな明るい街が一日も早く出現することを願いながら筆をおきます。つ。

(つ)

サイパン

第二次世界大戦戦跡めぐり

美濃部 欣平

今年の4月24日から28日まで、デルタ航空でサイパンを訪れた。今回で2回目のサイパン旅行となった。飛行時間は約3時間だったから、比較的近い外国旅行といえよう。深夜の到着(朝便もあり)だったので、街灯も乏しい空港からホテルまでの時は、真っ暗で何処をどう走ったのかわからなかった。ホテルはサイパン中心部のガラパン地区にある。



遠方にサイパン最高峰のダボチョ山を眺む

この地区には、比較的大きなホテルが多く、いずれも、エメラルドグリーンに輝くフィリピン海と真っ白な珊瑚礁の美しい砂浜に面している。現在はサイパンの観光地として、華やかなリゾートムードで一杯だが、第二次世界大戦のマリアナ戦争では、1944年6月に海空から大挙して押し寄せてきたアメリカ軍と日本軍との熾烈な市街戦があった。日本の統治時代には、約1万4千人の邦人が生活し、神社、学校、病院等もあったが、そのほとんどが破壊されてしまった。夜が明けて明るくなると、ホテルの前に、島で最高峰のタボッチョ山が見えた。この山は、硫黄島戦でのスリバチ山地域の戦闘と同じく日米両軍は、山の自然洞窟を利用していくつもの塹壕から、神出鬼没で攻撃して、米軍を散々手こずらせた。だが、結果はアメリカ軍の優勢に負け、更に北へ敗走したのである。在留邦人も軍と行動を共にし、ジャングルの中を逃げ回ったという。南国の抜けるよう

な青い空の下で、深い緑のジャングルに覆われたタボチョ山を毎日眺め、悲しい気持ちで当時をしのんだ。

アメリカメモリアルホール 翌25

日は、妻と一人でガラパン中心部にあるアメリカ記念公園へ行つた。整然とした緑の敷地に第一次世界大戦の米軍戦死者の慰霊塔や、サイパン戦当時の貴重な資料や写真が展示された戦争記念館がある。戦史は米軍側と日本軍と在留邦人側の証言などが平等に扱われ、丁寧に展示されていた。日米両軍の遺影はいずれも若々



アメリカン・メモリアル・パーク

しく清しい面立ちで、胸打たれた。翌日から津田昭雄氏というガイドの案内で日本軍の戦跡を見て歩くことになった。シュガーキングパーク 26日サイパン中部にあるシュガーキングパーク(砂糖王公園)へ行った。此処は日本統治時代の邦人社会の集いの場であった。鳥居や灯籠のある日本風庭園が作られ、彩帆(サイパン)神社という神社もあった。砂糖王と呼ばれた南洋興発会社の創立者松江春次氏の銅像は、現在も立像として残っている。公園の向かい側の敷地には



シュガーキングパークでガイドの津田氏と筆者

刑務所 病院など堅牢に作られたコンクリートの建物があつた。しかし、アメリカ軍の総攻撃を受けて破壊されたり、至る所、銃弾の跡らけになり、外側だけの残骸となつて、辛つじて残つていた。



日本人刑務所の跡

アスリート飛行場跡 現在日本からサイパンへ旅行して到着するのは、サイパン国際空港である。その隣接地一帯は旧日本軍のアスリート飛行場跡で、常夏の暑い太陽に焼かれながら、頑丈なつくりのコンクリート製のトーチカや弾薬庫や海軍の司令部や執務室であつたらつと

推定される建物の残骸が草むらの中に散在していた。そのほとんどが爆撃を受けて、吹き飛ばされ無数の弾痕が残されていた。アメリカ軍の攻撃の凄まじさを物語つていた。広い戦跡地には、ガイドの津田さんと我々夫婦だけが居なかつた。辺りは悲しくなるほどの静けさであつた。



厚いコンクリート製の海軍弾薬庫跡

テニアン島 サイパンのアギガン岬に立つと、B 29 エノラゲイが広島、長崎に原爆を搭載して飛び立ったテニアン島が目の前約5キロメートル先に見えた。群青色の海に浮かぶ小さな島だつた。此処

があつた。恐ろしい原爆の基地だつたのかと思わず息を止めて残酷な戦史に残るテニアンを見つめた。

チャランカノアの町 戦前は、日本人町と呼ばれた。南洋興発会社の砂糖キビ栽培に従事したり、製糖工場も作られて日本からの移民が多く住み、日本人学校や神社もあつたという。現在でも、当時の工場の一部が、校舎として使われている。

神社の跡は、カトリック教会の墓地になっているが、鳥居や灯籠もそのまま残



チャランカノア元日本人学校長宅
(現在は現地の人が居住)

旧日本軍アスリート飛行場跡にあつた戦車



サイパン中部戦跡カトクタブラ谷地戦車



「黒木大隊玉砕の地」の標

ついで、かつての日本人街の面影が偲ばれる。

更に南国の緑の木立の中に点在するチャモロ人の居住地の中に、一見して日本家屋とわかる古い家屋が「軒残されていた。ガイドの津田さんの説明だと南洋興発の宿舎用だつたもので、当時、学校の校長先生と教頭先生の家だつたという。

そのうち一軒はほとんど廃屋だつたが、校長先生の家は今、チャモロ人の老夫婦が住んでいるという。

庭には、ブーゲンビリアの花や日本人が南洋桜と呼んでいた真っ赤な火炎樹が咲いていた。奇跡的に戦火を免れて長い年月を生き抜いてきた日本の家を見ながら、戦前、戦中の移民の方々の姿を想像した。

この町の人々も1944年6月15日にチャランカノアの町を挟んだ北と南の海岸から上陸してきたアメリカ軍の攻撃に追われ、島の北へ北へと逃げまどう苛酷な運命に巻き込まれていったのだ。

開業ABC (xv)

中村雄彦

学生諸子に望む

学生諸君には是非専攻科目以外に実施して貰いたいと思つてゐる。

私の父は東大経済学部卒だが、私は東大卒ではない。しかし今や東大の理一より難しいと言われる、国立二期校(新潟大学)の医学部 同大学院をストレートで終えた。大学は自宅から徒歩15分だった。

父は東京麻布の地主の長男で、旧制新潟高校を出た縁で私の母方の祖父が副頭取だった新潟市の第四銀行に入行、東京麻布の自宅から日本橋の東京支店に勤務私も東京麻布の区立南山小学校に通つたが戦時中の学童強制疎開で新潟市の母の実家に転居、そこで中学までいき、高校からは重役になつた父の任務で両親と共に新潟市に暮し、大学に通つた。大学卒

後ミюнヘン大学に留学し、色々な医師達と出会い、チューリッヒ大学のブルク教授とは未だに交流を続けている。

専門は皮膚科、大学の研究室を離れ独立開業しても内外での学会発表、ドイツ語、英語を含む論文執筆を続け、学会発表は70回、書いた論文は80篇に達する。

当然の事ながら現在も学会発表、論文執筆を続けており、2010年3月には珍しい「炭酸飲料による固定疹」の症例2例を学会発表し、現在も東京「皮膚病診療」誌依頼の学術原稿を執筆中である。学術論文は出版された数を単に並べるのではなく、質が問題、私はこれまで世界初の論文が2編、日本初の論文は6編ある。全て開業後一人で行つたものである。

昭和60年には学術貢献著しい功績で「日本医師会最高優功賞」を受賞。2年前、朝日文庫より出た日本人脈記第4巻の医師篇で「日本の名医60名」の中に脳外科、心臓外科の医師達たちと並び全国6000名の皮膚科専門医中のただ一

人の皮膚科医として記載されている。現在会員数200名を越える新潟県上越市の新潟大学医学部学士会の支部長を務める。

いまだ研鑽に務める未熟の身だが、儼越ながら聊か私見を述べたい。

1. 読書をしる

カント、デカルトを原書で読め。今様の評論家と称する連中の書いたHow toものは読むな。時間の無駄。眼にも悪い。日本人なら最近亡くなった加藤周一氏、統制の取れた豊かな思想の中に遊べる。そして文化人類学の山口昌男氏、主義主張は読むものにまかせろ。その該博な知識を十分に自分のものとして書かれている文は最高である。

読書は生活の基本である、生涯良書を離さないこと。

2. バツハを弾け

今の若い人の殆どはバイオリンかピアノを習つたはずだ。生涯練習を続けること。学生時代は時間をかけて金にもなら

ない楽器の練習に使える最良の機会である。弾く音楽は群を抜いて最高のバッハ。そしてステージでソロを弾くこと、誰も聴いていなくても良い。

私は子供の時からバイオリンを習ったが、腕は悪い。しかしここ25年ほど毎年東京の一流ホールで行なわれる「医家芸術クラブ」主催の「ドクターズ・ファミリー・コンサート」に歯科医の娘のピアノ伴奏でバイオリン・ソロ演奏を行い、バッハ、モーツアルト、ベートーベン、ブラームスのソナタや協奏曲を弾いている。同時にピアノも習ったが、バイオリンと違い力を入れなかった。今は、昔や

ここにちは・ひとこと

か 茂 和 子
か 茂 和 子

30年ほど前に入会していましたが一度も舞台に立つ事がなく退会。現在、音楽を山口直子先生に「指導頂いています。宜しく。(音楽部)

ったバッハのインベンションやソナタアルバムのモーツアルトやベートーベンを弾いている。伴奏の娘は3歳からピアノを始め、小学校の時、市のコンクールで優勝している。

毎日楽器に触れる事。私は毎朝バッハの無伴奏バイオリンソナタから何曲か取り出して弾く。楽器の練習は忙しい者には短時間、無意味な曲は弾かない。今年のコンサートは、珍しいハイドンの協奏曲を弾く予定。

3 ルネッサンスの絵を見る

優れた美術品をみることは極めて大切な人生が豊かになる。絵画それもルネッサンスのものは最高。傑作を模写してもよい。日本の美術館はヨーロッパと違い絵の模写をしている人が少ない。上野の国立西洋美術館には作者不明の優れたルネッサンスの絵画が沢山ある。頻繁に利用することだ。

4 英語以外の外国語をやれ

諸君は英語はベテラン、英語以外の語学

をやれ、視野が広がり、教養はより深まる。フランス語、ドイツ語は必須だ。評論家の森永卓郎氏は日本の英語しか出来ない役人達が外国の真似をするから碌な政策が出来ないと言っている。

私は大学で必須だったドイツ語の他に、フランス語、イタリア語を現在まで6年続けている。一応文章は読め、会話は出来るが、一つの言葉を習得するのは容易ではない。学生の時十分にやるべき。

また大手語学学校が潰れた。賢明な諸君は高い金を出して語学学校などに行かないだろつが、多くの学校は無意味、テレビ、ラジオ語学講座を使う、金は不用。基礎さえあればどこでも通用する。

5 時には最高の料理を食え

兎角食事を馬鹿にしているのではない。食物は人間の基礎である。腹さえ塞げば良いのではない。連日最高の料理でなければ、時々食べるよっ心がける。最高と言っても名のある料理店の高価なものばかりではない、本に頼らない、自分

の舌を信すること、不味いか旨いか、直ちに識別出来ること。最初の一口で味の良否は分かる。食材を買って自分で料理するのもよい。新鮮で清潔だ。素材を生かす、短時間にバランスの取れた料理を作る。時間をかけない事、普段鍛えた舌で味をつける。料理屋の料理よりよい。

6 大学を就職予備校とするな

最後に強調したいのは、大学は人間の基本の教養を学ぶところである。安易な就職の手段と考えるはならない。今役に立たない事が将来最も重要なこととして生きてくる。今政治、実業のトップにいる人達の始どが、旧制高校を出ていない実学専門で突っ走ってきた人である。時流のみに左右される彼等の行動は連日報道されるところである。大学生に最も認識して貰いたいところである。

以上5点挙げたが、能動的なものばかり。他人との横並びも時には必要だが、主体は自分。他人に左右されず、自身で判断する。それには高い教養、良識が必

要。他人は変人扱いするが、ほっておけ、今に分かる。

繰り返すが、私の学歴は粗末で東大も受ければ入っただろうが地方の国立大卒である。父をはじめ、何人かいた叔父らは東大卒で、それぞれ要職にあつたが子供からみると大したことはなかった。何



一家で川崎大師へ初詣で（昭和49年）

よりも勉強しない、学術論文を書いたとは聞いた事も無い。

父は旧制新潟高校ではお手伝い付の一軒家から学校に通い、東大は東京麻布の

自宅から本郷に通学していた。しかし新潟の叔父達は本郷の下宿、狭い4畳半で不味そうな下宿屋の飯を食っていたのを思い出す。私は大学まで歩いて15分、両親の他に子供は私一人、6歳上の兄は学校や就職で家にいない。そこそこ広い家でゆつたりと暮らしていた。警沢ではないが、余裕を持って読書、洋楽、弓、空手、謡などの趣味に没頭できた。

学歴は後からついてくるだけ、本人が何をやり、何が出来、今も努力しているか問題。専門外の教養を身につけるよう終生自分を磨く、学校は出てからが大切だ。特に人々の暮らしと密接に関係する重要な仕事を持つ官僚を志す人に言いたい。大学4年位で卒業学問から遠ざかっていては、たかが知れている。国立大医学部を出て終生努力を続けている者からみれば底浅い教養の持ち主は瞬時にわかる。役人が省令を実施するのは深い教養と世間を見通す学識が重要。自己研鑽を怠らずに尽力してもらいたい。

ジオパークと糸魚川市

穂 苅 正 臣

歳を重ねると故郷を思ふ気持ちが強くなるのであるが、故郷に関わる事が新聞雑誌などに載るとなせか気になる。昨年九月、糸魚川市が「世界ジオパーク」に認定されたと報道された。ジオパークとは聞きなれない言葉だが、それが日本に三ヶ所決まり、その一つに選ばれたといっただから喜んで良いことなのである。

ジオパークは地球(ジオ)と自然公園(パーク)の結合語である。すでに認定されているところは十九ヶ国、六十三ヶ所に及ぶという。「世界遺産」は条約に基づいて保全・保護を主目的としているが、「ジオパーク」は、保全と活用(地域振興)を重要視し、教育、研究、観光面での活用も重視されるという。

故郷とは六十年近くも離れて暮らして

いるので、徐々に縁遠くなっていた。その故郷がなにかと気に懸かるようになってきたのは、十年ばかり前、糸魚川でのお祭りに誘われ、自動車であちこち見て回ったのがきっかけであった。

例えば、昭和四十年頃までは二百五十人も小学生がいたという山深い田舎の小学校の廃校後の姿を見たりして、草の生い茂る人一人いない校庭を前に、言い知れぬ寂しさを味わったりしたとき、「ふるさと」に対するいとおしさを感じたのだった。

こんな体験のあと、忘れかけていた生まれ故郷のことが気にかかるようになり、関心が高まっていったのだった。

加えて、今まで知らなかった縄文時代からのヒスイ加工跡の発掘などにも興味を感じ、ヒスイ流通の歴史的な流れなどにも関心が高まっていったのだった。

狭い旧糸魚川市には発掘された縄文・弥生時代の遺跡が四ヶ所だったが、現糸魚川市には十五ヶ所ある。さらに古代か

ら十七世紀までの遺跡はといつと二百七十七ヶ所もある。したがって、道路や鉄道などの工事をするとき遺跡に必ずぶつかるので、工事がなかなかなか進まないという。

こうして故郷に関心が向くようになって以後は、「医家芸術」の投稿にもおのずと糸魚川の歴史やヒスイに関する事が多くなっていった。ただ組織力のない私共が、いかに個人的な力で故郷を宣伝しても世間の反応がなく、ただ年月が過ぎていくだけであった。

昨年八月に中国泰安市で開催された世界ジオパークネットワークで、糸魚川市が国内第一号の世界ジオパークとして認定された。日本では同時に洞爺湖(北海道)、島原半島(長崎県)が認定されたのである。

世界ジオパークの中の名だたる観光名所地は、大小の火山湖が点在するドイツの観光地アイェフル、イングランドのり

ヒエラと言われるトーカー、奇岩が並ぶ中国雲南省の石林などである。

糸魚川市は日本を二分する断層「糸魚川静岡構造線」や本州や中部を縦断する巨大な地溝構造帯「フォッサマグナ」を確認できる特徴的な地形である。

さらに糸魚川市には「親不知・子不知」といつ日本海の荒波と人間との格闘が長い間繰り返されてきた歴史を伝える名勝がある。ここは北アルプスの北端が日本海に落ち込むところであり、旧北陸道を通る昔の旅人が、断崖絶壁が背後に迫り荒波の打ち寄せる狭い砂丘を命がけで通過した所である。

糸魚川にはいろいろな歴史的な古墳などがあるが、近くの青海町にある標高千二百二十二メートルの黒姫山には、ここが日本かと思われるようなすさまじいばかりの大ドリーネ群が広がっている。そこはセメント会社の所有地であり、今までは、なんの指定を受けることもなく放

置されていた。その麓にある「福来口」は、青海石灰岩三億五千年の地球史の中で形成された、日本最長規模の可能性を持つ大洞窟である。

なおまた、秘境と呼ばれる「マイコミ平」にも、日本で最深の「白蓮洞 四百五十メートル」をはじめ堅穴群が多数あり、太古の昔からの神秘的な自然環境の姿を現在でも見ることが出来る。

福来口の大鍾乳洞には奴奈川姫が住んでいて、ハタで織った布を川でさらしたと言われる。その川が布川といわれ、洞窟から滝となって流れ出る水が、白い布をさらしているかのように向かって伸びている。この伝説は洞窟の神秘的な姿を見た前人が、謎の多い奴奈川姫と結びつけてこしらえたものと思われる。

こつした類まれなる大洞窟は、地元が誇る貴重な地質的な資源である。平成元年五月に青海町とセメント会社が「福来口洞窟調査委員会」を発足させて第一

次調査を開始し、二次 三次と延べ十五日間にわたって調査した。

本洞窟部の調査は延長千二百メートルの地点で、湧泉に阻まれ総延長二千七百十四・五メートルの全貌は明らかにはできなかった。

とはいえ、その結果「大洞窟」と「地底大河」で結ばれる中に「大鍾乳石群をはじめ二次生成物」の発達が見られ、洞窟の規模、地下水量など、国内では最大規模の洞窟であることが判明したのである。

しかし、今までは一般の人の立ち入りは禁止されていた。ジオパーク認定を機に地権者も快諾し、国内最大級の福来口鍾乳洞の公開に見通しがたったとのことである。

これによって糸魚川の知名度が向上し、観光事業にも資する地域の活性化が期待されるのである。

初夏 富良野路

御園生 潤

昨秋以来、公私とも何かと慌だしく遠出する機会に恵まれないでいたが、この6月18日の公休日にかねてからの希望であった夏期の「ふらの・びえい」ノロツコ号の旅を好天のもと満喫できた。

割安感のある「ふらの・びえいフリーきつぷ」を利用して、札幌発8時25分の電車特急(789系)「スーパーカムイ5号」で旭川に入る。旭川駅はこの秋、高架化・新駅への切り替えが予定されており、長らく馴染みの深かった現駅舎ともお別れとなる。

富良野・美瑛ノロツコ号(富良野行)は、地下道を通り富良野線ホーム(7番線)から10時3分の発車。既に列車は入線しており、チョコレート色のノロツコ

号がこの日は3両編成、後ろ側(旭川方)にカラフルな塗装のディーゼル機関車(DE15型)が連結され、富良野方向へ後から押す形での運行となる。ちなみに先頭3号車の前部には簡易運転台が設けられている。

10時2分着の上り普通列車が到着した後発車。席をとった1号車には、ディーゼル機関車のエンジン音がほどよく伝わってくる。客車列車特有のジョイント抜ける外気も心地よい。

西神楽あたりは上川盆地の見事な水田が広がる。6月の水田の光景も味があり、旭川空港から飛び立った飛行機の姿も目にまぶしい。

美瑛で7分停車。記念撮影する乗客の姿ものんびりといった感じ。上り普通列車(728D)と交換して発車する。富良野線の通常の普通列車キハ150系の塗装は、ラベンダー(ワイン)色の紫と緑色の帯で、地域性をイメージさせて

くれる。

次の美馬牛(びばつし)までは速度を落として走行する。富良野線屈指の「1号ポイント」をゆっくり楽しんでもらおうとの配慮だ。ラベンダーの花は最盛期前だったが、沿線にはルピナス(昇り藤)をはじめとした色とりどりの花が、美しく目に映った。

こつした中を、いなくなつた汽笛を鳴らしながら進んでゆくノロツコ号は、旅情を一層盛り上げてくれる。並走する道路には、車や自転車をとめてノロツコ号の通過を眺めたり映像に収めたりする人々の姿が目についた。

列車は上富良野、中富良野と停車、今から約20年も前に訪ねたこの地のことを思い起こさせる。再び速度を落として富良野の景観を満喫させてもらい、定期11時37分富良野に到着した。

好天に恵まれたこの日は、十勝岳連峰もつかがえ、沿線の風景・歴史・産業などを解説する女声アナウンスを聞きなが

ら、改造客車ノロツコ号を楽しんだ。客車列車の減少の続く昨々、自分の若き日をいろいろと思い返していた。

富良野ではやや慌たしく乗り換えて、上りの快速「狩勝」(3430D)で滝川に向かう。この日運用された車両は、フアンサービスで国鉄色(朱色)にイメーヂチェンジした、昭和57年製のキハ40 777。地方紙でも紹介されたこの列車に巡り合えたのもラッキーだった。単行(1両編成)のこの列車、乗客の入りはほどほどだったが、車窓から眺めていると空知川の河原などで熱心なファンがカメラでこの列車を狙っている姿が見受けられた。

この後列車は芦別、赤平と主要駅のみ停車していく。赤平を過ぎると、空知の水田地帯が広がる。ラストスパートばかり、列車がまっしぐらに疾走する区間で、車窓は四季それぞれ、まさに北海道

らしさを強く味わえる私の好みの区間だ。そして滝川に定刻12時35分到着した。

滝川ではらく時間があつたので、この車両を画像に収めた。乗降口横には列車名「狩勝」のプレートが差し込まれていたが、急行「狩勝」で使用していたと思われる。白地に赤で書かれたもので、粋な計らいと感動した。

旅に出ると、何らかの感動・発見を味わって帰宅するものである。読者の方々の中には私よりもはるかに鉄道に詳しいお方がおられるので、内容に関して指摘を受けそうに思いつつも、楽しかったつかの間のフリータイムのことを投稿させていたいただいた。

.....
北海道医療新聞社のご好意により転載させていただきますました。

子供と写真

池田 壽雄

3月31日の午後2時ごろ、私は妻と3人の孫と一緒に、近所の黒鳥山公園に遊びに行つた。いつもの習慣で、車にはデジカメ(ソニー製 アルファ1350)と、三脚を乗せておいた。途中でコンピニの『ローソン』に立ち寄り、おにぎりなどの弁当を妻に買つていた。公園には約15分で着いたが、駐車場は一杯で、少し離れた場所の第一駐車場に留めねばならなかった。

黒鳥山公園には家族連れの客が既に大勢いて、桜の木の下にはビニールのシートを敷いて、弁当を食べている姿がこころに目に見られた。私たち家族も同様に桜の木の下で弁当を食べ始めた。私はおにぎりを食べたが味はなかなか良くて旨かった。3個も頂いた。『げんこつおにぎり』とラベルには印刷されていて、

鮭が少量はいつていた。食事が終わると私は早速三脚にカメラをセットして写す準備をした。

すると、10歳の孫（池田裕菜 ユナ）が興味を持ったらしくて、カメラの写し方を教えてくれと言っから、花を写すときにはこう、人物を写すときはこう、望遠レンズを使うときはこうなどと教えてやったら、のみこみがとても早くて、たった1回教えてやっただけでたちまちマスターしてしまった。

カメラには自動焦点の機能があつてピントが合った瞬間に『ピッ』と小さな電子音が鳴るよつな仕掛けがしてある。三脚にカメラがとりつけてあつたから、やや重量があつて子供には少々無理な重さでも、カメラぶれの心配はなかつた。

裕菜は忽ち、六分が七分咲きの桜（ソメイヨシノ）の写真を撮り始めた。さらに場所を移動して、枝垂れ桜も写した。この桜はピンクの色が濃くて美しかった。孫たちは満腹して機嫌が良くなり大声を

あげてはしゃぎ、あちこち走り回っていたが、勿論一人の妹たちにもレンズは向けられた。タンポポやパンジーの花の傍を通つたときには、それも写していた。合計50枚ほど写したと思う。写真の90%は孫が写したものである。帰宅してパソコンに画像を取り込み



少女の感性がみずみずしく表現された作品ですね

し版に20枚ほどプリントして驚いた。立派なものだったからである。

伊勢市にもつ一人のお爺ちゃん（島田保さん）が孫たちにはいる。定年退職後にカメラを購入して、伊勢市の開催する写真展に応募するよつなレベルのアマチュアカメラマンである。プリントしたばかりの写真は『表面が濡れているから触つてはダメ』と教わつたらしくて、孫たちは忠実にそれを実行していた。

私たちの身の回りには、次第に電子機器に囲まれるよつになつた。テレビ、電話、ケータイ、台所では炊飯器、湯沸し、パン焼き、冷蔵庫、電子レンジ、IHなどなど。掃除機、洗濯機は勿論である。我々大人よりはるかに早く子供達は、こよつな電子機器の扱い方に習熟してしまつた。

さつそく、『10歳のカメラマンの写真展』を『いけだクリニク』の待合室で開いた。

出会い

蒲谷 玲子

「旧と新の融合、進化し続ける注目の都市ベルリン」そんな言葉その儘の先鋭都市ベルリンをあとにマイセンでは陶磁器のウィンドショッピング。そしてエルベ川のフィレンツェと称されるドレスデンへと車は進む。河畔一帯がユネスコ世界遺産として歴史的建造物がエルベ川に沿って立ち並ぶ圧観。

まず、その一つのツインガー宮殿内の巨匠絵画館を訪れる。イヤホンガイドに従って夥しい数の名画を鑑賞。やがてレンブラントの大作の前に集結した。確かに大作には違いないがこれは私の好みのレンブラントの色じゃないぞと生意気にもひとり視線を横に反らせたとき、私の体に電気が走った。殆どひと気の無い壁面に懸かったその絵に駆け寄った私
「SASKIA mit der rotten Blume

1562」

まさに「花を持つサスキア」レンブラント。それは全く思いがけない出会いだった。

仄暗いバッグから身を乗り出す様に、百姓女の様に健康で素朴なサスキアが小さな赤い花束を手に私にさし出し、微笑んで居る。

「やっと会えましたね、サスキアさん!! あなたここに居たんですか」と私は心の中で叫んだ。これぞレンブラントの濃厚な色の量感、艶と輝き。学生の頃、私は確か「紺青」という雑誌のこの絵の頁を切りとり、大切にしていたのだった。思いがけず実物に出会った喜びに酔い、また当時の私を思い出され、しばしその場を去り難いものにした。

「でもサスキアさん、貴女ってとんでもない悪妻だったんですってね。悪妻の亭主は出世するとか。そんなことばつでもいいわね。憧れの貴女に会えたんですもの。それじゃサマーナラフサスキアさん!



写真はアルテマイスターの入場券

(原稿は筆者が居住する「エデン便り」から転載)

いつかまた、お会い出来るかしら……」私の胸は幸せな思いに浸されつつ、今を盛りの紅葉(黄葉)に彩られた名画の様な街並みと、それに併行して流れゆくエルベ川に従いつつ、私をのせた車は更にドイツを南下してゆくのでした。